

映し出された滅亡 ——『渚にて』と米国社会の核兵器イメージ

川口 悠子

はじめに

1959年公開のハリウッド映画に、『渚にて』(*On the Beach*)という作品がある。イギリスに生まれオーストラリアに移住した人気作家、ネヴィル・シュート (Nevil Shute) が1957年に発表した同じ題名の小説を原作とし、社会派として知られたスタンリー・クレイマー (Stanley Kramer) 監督が当時のスター俳優を起用して撮影したものである。¹⁾ この作品は、北半球で起きた全面核戦争により放射能汚染が地球全体に広がり、人類のほとんどが死滅した1964年の世界を舞台としている。物語の軸は、戦争をかわろうじて生き延び、オーストラリア南部のメルボルンに退避してきた米国の原子力潜水艦ソードフィッシュ号 (原作ではスコープイオン号) の艦長、ドワイト・タワーズと、まだ汚染されていないメルボルンで、近づくつつある人類最後の日待つ人々との交流に据えられている。核兵器、とりわけ核抑止論が全人類を滅ぼしうることを指摘した点で画期的な作品だと、同時代的にも今日までの研究者のあいだでも、高く評価されてきた。²⁾

この作品の製作背景に迫ったのが、ローレンス・ジョンストン (Lawrence Johnston) 監督、ピーター・カウフマン (Peter Kaufmann) 製作の、2013年のドキュメンタリー映画『フォールアウト』(*Fallout*) である。『フォールアウト』は『渚にて』原作の執筆から映画化の過程までを追い、核兵器をめぐる1950年代後半の状況からシュートのライフ・ヒストリーまで幅広く目配りした秀作である。シュートの家族や映画の関係者、研究者のインタビューを多用している点も興味深い。

『渚にて』の特徴のひとつは、全人類の滅亡というテーマにもかかわらず、死や破壊といった滅亡のありさまが作品中で直接描かれることがほとんどない点である。映画の公開当時、この点は、放射能のおそろしさや人類の未来についての危機感といった、作品の中心的なメッセージを伝えるうえで効果的だと、おおむね肯定的に評価されてきた。たとえば『ニューヨーク・タイムズ』(*New York Times*) の批評は、「人生は美しい宝物であり、これを壊滅から守るために、人類はまだ時間が残されているうちに、なしうることをすべてなさなければならない」という点を「きわめて効果的に強調している」と述べている。また映画の公開当時、軍関係者や政治家、メディアが、実際には放射性降下物に対して身を

¹⁾ 以下、原作からの引用はネヴィル・シュート『渚にて——人類最後の日』(佐藤龍雄訳、東京創元社、2009年)による。なお作品全編の日本語初訳は井上勇が手がけ、1965年に東京創元社より刊行されている。佐藤龍雄「訳者あとがき」シュート『渚にて』、462頁。

²⁾ Joyce A. Evans, *Celluloid Mushroom Cloud: Hollywood and the Atomic Bomb* (Boulder: Westview, 1998), 144–49; “Arms Peril Seen in ‘On the Beach’: Scientists Endorse Film as Warning to Mankind—Nobel Winners Speak,” *New York Times*, December 19, 1959, 30.

守ることは「可能で、しかも比較的簡単だ」などと批判したことは、この作品が観客に対して影響力を持つと考えてのことである。日本でも、『毎日新聞』の映画評は、「原水爆戦の惨禍」を「もっぱら間接描写によって」表現したことで、「悲劇の大きさを強調することに成功している」と賞賛した。³⁾

しかし『渚にて』に対しては、文化史研究者のジョイス・A・エヴァンズ (Joyce A. Evans) が1998年の著作で指摘したように、「非現実的」だという批判も存在する。映画の公開当時も、「観客が、現実的な恐怖を描いたシーンを見ることはなく…人類の歴史のなかで考えられる限りもっとも危険な状況が、間が抜けて、SFのように映る」と疑問が呈されたこともあった。さらに日本では、「原爆の体験を身にしてみてもうけた日本人の目でみると、まだまだ切実感が欠けている」と作家の円地文子が述べたとおり、広島・長崎の原爆被害を参照した指摘もあった。⁴⁾

そこで本コメントでは、なぜそのような描き方がなされたのか、『フォールアウト』の内容に補足を加えつつ検討した。以下、まず作品中での「人類滅亡」の表現を確認し、つづけてその背景を、1950年代後半の米国における核兵器に対する認識や、広島・長崎の原爆被害に対する理解を手がかりに論じる。

1. 『渚にて』における人類滅亡

『渚にて』で想定されているような急性放射線障害は、高熱や嘔吐、下痢、臓器や粘膜からの出血などの症状に特徴づけられ、被害者はしばしば長時間におよぶ苦痛にさいなまれることが知られている。最悪の場合は死という帰結を迎えるが、回復した場合も、後遺症や子孫への影響のおそれは被害者にとって重大な問題となった。広島と長崎での、核爆発による負傷や死の場合は強度の火傷や外傷もともない、突然強いられるむごい死は、人間としての尊厳を奪うもので、現代の戦争のもたらす惨禍を象徴するものだと指摘されてきた。⁵⁾

しかし、『渚にて』の中の死は、ほとんど苦痛を伴わない。原作では主だった登場人物のほとんどについて、放射線の影響で嘔吐や下痢をし、身体が弱っていく様子が綴られているが、⁶⁾ 映画ではそれらの描写は大幅に削られている。かわりに、隣人を迎えてのホームパーティ、夏のビーチでのひと時やヨットレース、溪流でのマス釣りなど、あたかもいつものおりの生活が続いているかのような、明るく和やかな様子が描かれる。またメルボルンでは放射性降下物が迫りつつあるにもかかわらず混乱や喧噪は見られず、市民の安楽

³⁾ Bosley Crowther, review of *On the Beach*, *New York Times*, December 18, 1959, 34; “‘On the Beach’ Scored by Civil Defense Head,” *New York Times*, December 18, 1960, 34; 「核戦争の恐怖」『毎日新聞』1960年2月12日、夕刊、3面。

⁴⁾ Unsigned review of *On the Beach*, *Time*, December 28, 1959, 46; 「映画『渚にて』をめぐって」『朝日新聞』1959年12月19日、朝刊、6面。

⁵⁾ 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編『原爆災害——ヒロシマ・ナガサキ』（岩波書店、2005年）、91-174頁；濱谷正晴『原爆体験——六七四四人・死と生の証言』（岩波書店、2005年）。

⁶⁾ シュート『渚にて』、415-59頁。

死用の薬物を配布するなど、政府機能も維持されている。たしかに、登場人物が日常生活に執着するのは、近づきつつある死に対する葛藤の表われという側面はあり、パーティで全面核戦争の原因をめぐって口論が勃発するなど、うわべの平穏さを破って現実が突きつけられることもある。とはいえ、登場人物は最後には運命を受け止め、体調に異変を示す気配もほとんどないまま、自らの手で尊厳のある死を迎える。後遺症や子孫への影響などの不安も、人類全体が減ぶゆえであるが、『渚にて』の世界には存在しない。

しかも、スクリーンには遺体や傷ついた人間の姿はいっさい映し出されず、救護所や墓地など、負傷や死を連想させるようなものも同様である。あたかも、人間はなんらダメージを受けることなく、一瞬でいなくなったかのような印象を抱かせる。そのうえ、都市の建造物は無傷で、核戦争による破壊の跡はまったくない。映画にはメルボルンに加えて、米国西海岸のサンフランシスコとサンディエゴが登場するが、住民がいなくなってからしばらく経っているこれら二都市もまったく荒廃しておらず、日差しのもと、港には穏やかな波が打ち寄せて、陰鬱な雰囲気は感じさせない。米国沿岸の偵察に来たソードフィッシュ号が、まったく無人の、しかし傷一つないゴールデン・ゲート・ブリッジの下を通過していくところは、本作品中もっともよく知られた場面のひとつだろう。

このような死や破壊の描写（の欠如）は原作にも見られるが、映画版でより特徴的である。原作ではわずか二箇所、しかも簡潔な描写ではあるが、遺体が描かれている。スコピオン号の偵察任務の途中、乗組員は、上陸したシアトル近郊（映画ではサンディエゴ）で一体のすでに腐敗した屍を発見する。また、ジョン（映画ではジュリアン）・オズボーンは、短い外出のあいだに、放射線障害を発症した母がベッドの中で薬を飲み、命を絶っているのを見つける。⁷⁾ 都市も破壊されており、たとえば潜水艦がサンフランシスコに接近したときにまず目に入る光景は、「橋の南端をささえる支柱が倒壊したのが原因」で、ゴールデン・ゲート・ブリッジが「崩落」している光景である。さらにゴールデン・ゲート・パーク周辺の建物は「核兵器の爆風と火炎による被害をこうむって」、「もはや、とても人が住んでいられる場所には見えな」⁸⁾ くなっている。⁸⁾ さらに、放射性降下物が近づきつつあるメルボルンの街では人々が職場を放棄して、公共サービスや商店の営業が停止し、また物資の流通が滞るなど、街が次第に荒廃していく情景も描かれた。⁹⁾

2. 1950年代後半の米国における核兵器のイメージ

『渚にて』の中で、放射線によってもたらされる人類全滅が、このように苦痛や死、破壊の直接的なイメージと切り離されたかたちで描かれたのはなぜだろうか。理由のひとつは、『フォールアウト』が、まさにそのタイトルで示しているとおり、放射性降下物の危険性に関心が集まる時代に執筆・製作されたことである。1950年代半ば以降、核実験場や核攻撃の地点から遠く離れていても、しかも目に見えないかたちで、放射能の被害を受

⁷⁾ シュート『渚にて』、289, 426頁。

⁸⁾ シュート『渚にて』、272頁。

⁹⁾ たとえば、シュート『渚にて』、384, 388-90頁など。

けるという放射性降下物の恐ろしさが米国社会で、また世界的に、知られるようになった。そのきっかけのひとつが、1954年3月1日に米軍が南太平洋のマーシャル諸島にあるビキニ環礁でおこなった水爆実験による、いわゆるビキニ事件である。日本のマグロ漁船第五福竜丸が、事前に指定されていた警戒区域の外にいたにもかかわらず放射性降下物を浴び、乗組員が急性放射線障害を発症、のちに1人が死亡した。同じく指定区域外にいたマーシャル諸島の人々も被曝し、また大気や海洋が広範囲にわたり汚染されたことも明らかになった。その後1950年代末には、放射能汚染の生体濃縮、なかでも子どもが飲む牛乳の汚染が明らかになったことで、不安感は一気に高まった。¹⁰⁾『渚にて』が核爆発やそれがもたらす破壊ではなく、放射性降下物の脅威に焦点を当てたのは、このような状況を反映したためだった。

加えて、広島・長崎の原爆被害に対する米国社会の認識も一定の影響を与えたということが、おもに次の二つの点から考えられる。一点目は、当時の米国では「核」を悲惨な被害と結びつける想像力が働きにくかったということである。米国では、第二次世界大戦は「よい戦争」であり、その勝利のために原爆の使用は必要だったという認識が一般的だった。米国政府が、占領下(1945年8月～1952年4月)の日本や米国において情報統制をおこない、原爆による被害状況、とりわけ放射線被害を隠蔽したことの影響も大きい。冷戦下において核軍拡が決定的な重要性を持つようになったため、米国政府は核兵器が必要であると強調するとともに核実験をめぐる情報統制を続け、同時に、自分たちは核攻撃を生き残ることができるという楽観的なイメージを流布した。すなわち、多くの米国市民にとっては、『フォールアウト』で紹介されていたような、広島や長崎での被害実態をめぐる情報は非常に乏しく、視覚的なイメージや、放射線の被害状況に関する知識はとりわけ限られていた。いわば、核の被害の悲惨さを描くためのピースが、そもそも不足していたということになるのか。¹¹⁾

二点目は、広島・長崎への原爆投下にかかわる問題である。文学研究者のマリアナ・トルゴヴニック(Marianna Torgovnick)は、核攻撃を描いた米国の作品に「無人の都市」(empty city)というモチーフがしばしば見られることを指摘している。すなわち、被害を「人間の一部だったとはほとんど分からないような遺体」ではなく、人間の「消失」によって表現する方法である。この「無人の都市」には、われわれの関心を、第二次世界大戦中の空襲で破壊された街や「核の歴史の原点」である広島・長崎に導くことはないという点で、そうしたできごとの「抑圧や転位、否認、そしてフロイトの言う現実感喪失」が見られると、トルゴヴニックは論じる。そして、その典型例として挙げられているのが、まさに『渚にて』のサンフランシスコなのである。¹²⁾

¹⁰⁾ アラン・ウィンクラー『アメリカ人の核意識——ヒロシマからスミソニアンまで』(麻田貞雄監訳、岡田良之助訳、ミネルヴァ書房、1999年)、109-41頁。

¹¹⁾ モニカ・ブラウ「検閲——原爆報道はどう禁じられたのか」(繁沢敦子訳、時事通信社出版局、2011年)；高橋博子「封印されたヒロシマ・ナガサキ——米核実験と民間防衛計画」(新訂増補版、凱風社、2012年)；ウィンクラー『アメリカ人の核意識』、143-78頁。

¹²⁾ Marianna Torgovnick, "Gone Nuclear: Representing Hiroshima and Nagasaki in the United States," *Nanzan Review of American Studies* 32 (2010): 39-42.

トルゴヴェニクの議論を敷衍すると、第二次世界大戦中の広島・長崎における加害者性の否認は、核保有国である米国の、冷戦における加害者性の否認にもつながっているといえる。この二重の否認は、たとえば、人類全滅の原因となった核戦争の加害者が映画にほとんど登場しないことに示されている。『渚にて』において、最大の被害者は「だれも核兵器なんか使っていない」¹³⁾にもかかわらず滅亡という運命を共有しなければならない、オーストラリアはじめ南半球の人々であり、加害者は核戦争を始めた北半球の諸国家である。だが、北半球の人々はすでに全滅して責任を問われることはない。唯一の例外は生き残った原子力潜水艦の乗組員、なかでも主役のひとりであるタワーズだが、彼らは帰るべき故郷と家族を失った被害者としての側面が強い。米国の観客の多くは、タワーズやオーストラリア人の登場人物に自らを重ね合わせて、核戦争の加害者ではなく被害者となる可能性を思ったのではないか。

人類全滅のきっかけとなった核戦争が偶発的に始まったことが原作より強調されている点も、加害者の存在を希薄にしている。『渚にて』の原作では、戦争の北半球全体への拡大は偶発的要因によるとはいえ、そもそもの発端はソ連と中国とがお互いに核爆撃をおこなったことだったと説明される。¹⁴⁾しかし映画では、戦争の発端そのものが勘違い、すなわち偶然にある。具体的には、核ミサイル基地の兵士が、レーダーに映った正体不明の影を核ミサイルだと誤認し、とっさにミサイルの発射ボタンを押したことが、破滅の第一歩だったのである。この兵士がどの基地の誰なのかは作品中で特定されないことも、責任の所在をいっそう曖昧にしている。なお、偶然のミサイル発射を引き金に全面核戦争が始まるという不安は、ソ連の人工衛星スプートニク号打ち上げの成功(1957年)によって大陸間弾道ミサイルの可能性が現実味を帯びたことをきっかけに生まれ、1960年代に核保有国が増加したことで、より懸念されるようになったものである。¹⁵⁾この点でも、『渚にて』は当時の米国社会の動向を反映していた。

さらに、核戦争を止められなかったのは人類社会全体の責任だというメッセージも語られる。たとえば、核兵器を開発したのは科学者だと責める知人に対し、科学者であるオズボーンは、「これまで核兵器にかかわった科学者は皆、将来何が起きるか警告し」、「次々と請願にサインしてきた」にもかかわらず、「誰も耳を貸すものはいなかった!」と反論する。むろん、核は全人類が真剣に取り組むべき問題だという危機感の表現だが、責任を人類全体に帰することは、加害責任の拡散にもつながるものである。

おわりに

映画『渚にて』は核の脅威、とりわけ放射性降下物の危険性に警鐘を鳴らした作品として画期的で、高い意義を持つことは疑いない。しかし、この作品からは同時に、広島・長

¹³⁾ シュート『渚にて』、66頁。

¹⁴⁾ シュート『渚にて』、129-35頁。

¹⁵⁾ ウィンクラー『アメリカ人の核意識』、105頁。なお、スプートニク号の打ち上げ以前に発表された原作では、核攻撃は航空機からの爆撃によってなされたという設定である。

崎の原爆投下とその帰結について、また核保有国としての自国について、当時の米国社会の認識の限界も知ることができる。この作品が映し出す核兵器に対する認識は、とりわけ自身の身の安全を脅かすものとしての、同時代的な核兵器の存在を念頭に置いたものであり、かならずしも広島と長崎における被害状況に対する関心や責任意識を呼び起こすものではなかった。

ただし、日本にも同様の状況が存在したことには注意を払う必要がある。原水爆禁止運動が日本社会の関心を集めて大規模になったのは、1954年のビキニ事件の後であり、しかも人々の不安は当初、核実験によって自身の生存・生活が脅かされるという点に集中した。映画についても、この時期は黒澤明監督『生きものの記録』(1955年)や松林宗恵監督『世界大戦争』(1961年)など、核実験や核戦争に対する恐れを反映した作品が見られる。広島・長崎に生きる原爆被害者に関心が向かったのは、この段階を経てからである。¹⁶⁾だが現在でも、原爆被害の様相、とりわけ被害を受けた人々が戦後、後遺症や貧困、差別と闘いながら歩んできた苦難の道のりは、必ずしも広く知られてはいない。¹⁷⁾このことを考えると、『渚にて』は、日本社会における想像力と断絶したようでありながら、同時に日本社会における核兵器のイメージを映し出している一面もあるのではないか。

すなわち、米国の人々のみならず日本社会に生きる人々のほとんども、核兵器の被害者としての体験を直接的に持たないという点では非当事者であり、それゆえの限界もあると言わざるをえない。同時に、核時代を生きてきたという点では、ほぼ全人類が核兵器をめぐる問題の当事者でもある。これがために、これまで述べてきたように、直接の被害者の経験が見落とされた側面は否定できない。しかし、このように拡大した当事者性を想定してみることは、核をめぐる、日本と外国、とりわけ米国とのあいだでしばしば指摘される、記憶や認識のギャップを克服するための手がかりとなるのではないか。そのうえで、さまざまな当事者性のありように改めて目を向けることは、ナショナルなレベルだけでなく、ローカルな、あるいは個別的なレベルをも含めて、核をめぐる認識や広島・長崎の記憶の多様性、複雑さをより深く理解するきっかけにもなるだろう。

¹⁶⁾ 山本昭宏『核と日本人——ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』(中央公論新社、2015年)、25-34, 64-66頁。

¹⁷⁾ 濱谷『原爆体験』。